庭園 協会ニュース 第100号

一般社団法人 日本庭園協会
東京都新宿区西早稲田 1-6-3 フェリオ西早稲田 301
〒 169-0051　TEL:03-3204-0595（FAX 兼用）
E-mail : gsj20@m7.dion.ne.jp　URL : http://nitteikyou.org/
編　集：広報委員長代行・小沼 康子
　　委員・内田 均、鈴木貴博、豊藏 均
題　字：故・上原 敬二
発行日：2020（令和 2）年 3 月 18 日

「こだわり」ながらも、囚われない

尼﨑 博正

エチレンという不思議な気体がある。青バナナを黄色く成熟させるのに用いられるなど、日常の生活でも親しみ深い植物ホルモンだ。日本庭園の秋を彩る紅葉。その離層の形成を促して落葉の冬景色へと導いてくれるのも、このエチレンなのである。

それだけではない。物理的な刺激によって生成されたエチレンが、植物の成長を抑制するという。幹の屈曲したあの海岸の松の姿も、海風の刺激によって生成されたエチレンの仕業。盆栽の葉水や剪定などによる刺激も同じ効果があるというのだから興味はつきない。

このような変幻自在なエチレンの生理作用だが、感心ばかりしてはいられないのではないかと思ったりもする。

これまで私たちは共に、庭園に親しみ、技術の練磨に励み、己の美意識を培ってきた。その原動力の一つが「こだわり」といえるだろう。

しかし、「離見」、すなわち一歩離れて自らを問い直すという謙虚さを見失いがちになるのも人間の業。つまり、「こだわり」は往々にして過信につながる危険性を孕んでいるのではないか。

過信とは、「こだわり」に「囚われる」ことから始まると私は考えている。「人の振り見て我が振り直せ」とはよく言ったもの。「我見」を脱ぎ捨て、状況に応じて己の持ち味と力量を適材適所で発揮する柔軟さを、エチレンから学びたいものだ。「井の中の蛙」にならないためにも。

ところで、名古屋城二之丸庭園の発掘調査現場で面白い光景に出合って感動した覚えがある。あの豪壮な護岸石組の足元に、漆喰による乱杭や擬岩状の造形がなされているではないか。その仕事の見事さは唯ものではない。江戸時代の職人さんたちの心意気がヒシヒシと伝わってくる。

なかでも嬉しくなったのは、漆喰で塗り込められた池護岸の水面ギリギリのところに、今まさに水中から這い上がってきたかのごとく、石を埋め込んで造形された亀の姿を見つけた時。その微笑ましい遊び心に、底知れず惹かれたのである。

たわいも無い、と見過ごすなかれ。肩の力を抜いて、感性の赴くままに庭園を楽しんでいこう。私は、そう心に決めている。

京都造形芸術大学教授（評議員）

名古屋城二之丸庭園の発掘調査現場で出会った池護岸に埋め込まれた亀の造形（2016.7.22　筆者撮影）

庭園協会ニュース復刊100号を迎えて

編集委員

『庭園協会ニュース』は、本号で100号を迎えました。日本庭園協会創立の翌年、1919（大正8）年から発行してきた機関誌『庭園』は、1944（昭和19）年3月の通算286号をもって休刊となっていました。その後、会そのものは、第4代團伊能会長、第5代石橋正二郎会長、第6代田村剛会長、第7代飯田十基理事長、第8代宇野宗佑理事長のもと継続的に運営されてきました。

昭和30年代後半からの高度経済成長の勢いがやや落ち着き、人々が生活において安定や豊かさを重視しはじめた昭和50年代、庭園文化への関心も増してきました。その頃、本会では会員相互の交流や情報交換及び知識の取得等を目的に広報誌の再刊を望む声が高まってきました。そこで、1980（昭和55）年4月、岩城亘太郎氏の第9代理事長就任を機に、『庭園協会ニュース』が創刊されることとなりました。初代編集委員長を龍居竹之介氏（第1～30号）が担い、それから40年、その任は大平暁氏（第31～66号）、柴田正文氏（第67～98号）へと引き継がれ、本号で100号となったわけです。

初心に帰る意味で、復刊第1号を読み返してみましょう。その巻頭には、新理事長である岩城亘太郎氏の本会への想いが次のように語られています。

まず、本会が日本造園士会との合併が間もないことから、二つの方向に進みがちであるが、一つのものとして活動すべきであること、次に伝統的な日本庭園の技術の継承を念頭に、30歳未満の若い人たちに向けて伝統庭園技法の教育のため合宿実地研修を行うこと、さらに、海外のガーデンクラブとの交流にも意をそそぐという決意を述べています。

続いて第3号では、庭園技術の保持には技術者のみではなく、庭園の所有者、愛好家の情熱も不可欠であるとし、本会には、その双方が所属していることは心強く、それこそが本会の特質であるとしています。当号の巻頭に掲げられた「伝統庭園技術と本会」という一文には、これらのことがまとまって語られていますので、初心を改めて味わって頂きたく紹介します。

◇　◇　◇　◇　◇　◇

伝統庭園技術と本会

岩城亘太郎

伝統的な日本庭園の技術は、いまや国内のみならず、海外にも、高い評価を得ている。

これは大いに喜ぶべき現象ではあるがその反面、優秀な技術者を次々と養成しなければならぬという責務を、一層感じさせられるのも事実である。

過去3年実施し、本年も予定されている伝統庭園実技研修は、その意味でさらに強化充実させねばならない。自らの手で施工技術を習得する一方、見学会などを通じて、先人の偉業、理論などを学びとる必要がある。

いわゆる多角的学習が望まれるわけで、これによって人間の幅も広がり、仕事も大きくなるというものだろう。

こうした技術者だけで伝統庭園技術が保持されるわけでもない。庭園の所有者や愛好家が抱く庭園への情熱もまた不可欠である。

心強いことに本会は技術者だけでなく愛好家も加わっておられる。それだけに協会をあげて、伝統庭園技術の継承問題を論ずることもできるのである。また、それが本会の特質であろう。

全会員結束して、わが国の庭について考えて行きたいものである。

（第3号　巻頭言全文）

◇　◇　◇　◇　◇

ここに掲げられた内容は、本会の目的であり存続意義そのものでもあります。現在、これらは技術、国際活動、鑑賞研究の各委員会を中心により活発に推進されています。『庭園協会ニュース』は、それらの活動の広報や記録はもちろんのこと、加えて新しい時代に求められる「庭園」に応えるべく有効な情報や研究成果等の発信に努めてまいります。

会員の皆様には、「庭園協会ニュース」100号発行を支えて頂いたことへの感謝と共に、今後とも変わらぬご支援、ご協力をお願い申し上げます。

『庭園協会ニュース』第1号の巻頭言、1980(昭和55)年6月22日発行
※写真キャプション：55年春の見学地の一つ（京都・野村別邸）

高木枝打ち剪定講習会 講習内容と初級修了証授与者の紹介

編集委員

日本庭園協会本部は、宮城県支部と共催で、高木剪定の技術向上を目的に「高木枝打ち剪定講習会」を実施しています。講習内容は、建設用重機が使用できない場所での作業を前提としたロープを使用する技法で、初級、中級、上級のクラスに分け順次ステップアップ可能なプログラムで進めています。

●初級（基礎編）
・座学　安全作業の意義
・実技　ロープシステム及び結びの習得

●中級（基礎の応用編）
・座学　安全作業の意義
・実技　ロープでの昇降技術の習得、樹上の剪定及び剪定枝の降下作業

●上級（実践編）
・座学　安全作業の意義
・実技　実践的な昇降や樹上での移動及び資材・剪定枝等の昇降作業

講師
座学　内田 均（東京農業大学教授）
実技　吉田愛輝（有）吉田造園企画）

2019（令和元）年度は初級（基礎編）として4回開催しました。全国各地から集まった参加者20名の内、7名が初級（基礎編）の修了証を高橋 康夫会長より授与されました。授与にあたっては、実技や安全作業の意義について口頭試験において厳正な審査を行いました。

審査委員は、次のとおりです。

審査委員長…廣瀬 慶寛（常務理事　伝統庭園技塾　塾長）
審査員…吉田 愛輝（高木枝打ち剪定講習専任講師）
審査員…菊地 正樹（副会長　宮城県支部長）

初級（基礎編）修了証を授与されたのは次の方々です。

高橋 吉仲 氏
（東京都支部）
1951年、東京都生まれ。主な仕事はマンション、個人庭園管理。掃除を得意とする。庭吉。

渡邊 学 氏
（本部会員）
1976年、神奈川県生まれ。主な仕事は庭園管理、伐採。剪定を得意とする。渡邊植木。

伊藤 玲雄 氏
（宮城県支部）
1987年生まれ。庭園管理を主な仕事とし、特に石積みが得意。庭藤。

浅野 廉裕 氏
（宮城県支部）
1978年、宮城県生まれ。主な仕事は庭園管理。掃除を得意とする。(有)庭正庭芸研究所。

竹田 利光 氏
（宮城県支部）
1973年、宮城県生まれ。主な仕事は庭づくり、管理。得意は刈込み。(株)ザ・利光組代表。

黒森 海斗 氏
（宮城県支部）
1993年、宮城県出身。主な仕事は庭づくり、管理。得意はモルタル目地。（株）ザ・利光組。

川田 匠 氏
（宮城県支部）
1996年、山形県生まれ。主な仕事は庭づくり、管理。掃除を得意とする。(株)ザ・利光組。

全国支部長協議会報告

2020（令和2）年1月25～26日

仙波 太郎

令和となって初めての全国支部長協議会が令和2年1月25、26日と2日間の日程で、愛媛県松山市で開催されました。初日の会議は、道後・大和屋本店で行われました。高橋康夫会長をはじめ、全国の支部長の方々21名と四国支部会員9名を含め30名が出席し、本年の開催担当である四国支部の越智將人支部長を議長とし、高橋会長の挨拶から始まりました。

内容は、本部報告として、①伝統庭園技塾・連続基礎講座の日程、②支部・本部共催講座のコラボ、③日比谷ガーデニングショーへの出展、④現代日本庭園の巨匠たちについて、高橋会長と廣瀬慶寛技術委員長に説明があり、各支部長の意見を求めました。

続いて四国支部からの提案として、⑤建設造園業の若手従業員の確保のために、給料体制他・シニアの働き方、外国人実技実習生受け入れ事例、⑥作庭の現状、庭園のあり方、⑦樹木（苗木）の確保の仕方につい

て、越智支部長および支部会員2名より実例を含めた説明と問題提起があり、各支部長による意見交換を行いました。

菊地正樹協議会会長からは、「若手が夢と希望を持てるための勉強会、講習会を本気で考えていきたい」との投げかけがあり、真摯な議論が進み、関連して本部と支部および支部と支部においても情報共有していく方法なども話題にあがりました。

会議終了後の懇親会は、廣瀬技術委員長の乾杯のご発声に始まり、能楽の演出などもあり、和やかに歓談頂きました。最後に、次回協議会開催担当支部の新潟県支部長若杉松男氏による中締めの挨拶により懇親会は終了しました。

第７回　全国支部長協議会・会議のようす
（2020.1.25　道後・大和屋本店）

2日目は、松山市での見学会を行いました。市内中心部にある「坂の上の雲ミュージアム」と、「松山城」を見学しました。松山城においては天守閣まで上がり、松山城下を一望しました。やはり、参加した皆様の目の付け所は、石垣に向いていたように思います。昼食は、愛媛の郷土料理の鯛めしを楽しんで頂き、会議日程をすべて無事に終了しました。

皆さま、遠路はるばる、誠にありがとうございました。

（正会員　四国支部）

東京都支部主催　本部共催
第3回連続交歓講座『心の豊かさと幸福とは』

２０２０（令和２）年２月23日

加藤 精一

この連続交歓講座は、約3年前に、協会創立１００周年を機に、東京の庭の未来へ向けた活動の一環として、業界外の識者を交えながら新たな価値観による庭を創造していくために開催することとなり、東京都支部としての記念事業にしようと、幹部と若手の会員が集まり、実行委員会を立ち上げました。

何度も集まり喧々諤々し、この連続交歓講座「人と自然を結ぶ文化の大地＝人と庭の未来を開く＝」を企画しました。

第1回は、２０１８（平成30）年2月11日（日）「木を植えるのは、何のため」と題し、高野義武氏を講師とし、日比谷コンベンションホールにて開催し、第2回は、同年7月8日（日）「地球環境に配慮した建築」と題し、金田正夫氏を講師として、清澄庭園大正記念館にて開催してきました。

第3回は、本年2月23日、本部との共催で、「心の豊かさと幸福とは」と題し、大手町日経ホールにて開催いたしました。パネラーに、モンベル代表の辰野勇氏、建築家の藤森照信氏、解剖学者の養老孟司氏、コーディネーターに東京農工大学名誉教授の亀山章氏を迎え、ディスカッションを行いました。

今回は、協会以外の方にも来場して頂き、庭園文化を考える講座にしようと企画が発展し、広い会場にて開催することにしました。

しかしながら、ここからが大変でした。広いホールの入場者数と、チラシやウェブサイトでどれ程の人数が集められるかのバランスが想像できませんでした。これまでは仲間内だけで実施してきたため、世間への窓口がないということが、大きな壁となりました。また、開催資金のために、技術研修会で得た余剰金を充て、その他に協賛金と広告掲載の募集もお願いすることとなりました。

そして、開催のため、支部会員の各々が工夫し声をかけ、駆けずり回り、定員６００人近くまで申し込みを得ることができました。新型肺炎の影響で講師の方々とのレセプションを中止しましたが、講座は無事開催でき、参加の方々から、好評を頂き、安堵いたしました。

（東京都支部長）

第３回連続交歓講座『心の豊かさと幸福とは』のようす
（2020.2.23　日経ホール）